

<解説>

## 唯識の今日的意義について ——『唯識のすすめ』を中心に——

小林 昭良 長野生と死の教育を考える会

筒井 健雄 信州大学教育学部附属教育実践総合センター

The Significance of the Idea of 'Yuishiki' in the Japan of today

KOBAYASHI Teruyoshi : Nagano Association of  
Life and Death Education

TSUTSUI Takeo : The Center for Educational Research and Training,  
Shinshu University

Focusing on the idea of 'Yuishiki'-spiritualism, which is the depths Psychology Rooted in large-vehicle Buddhism, I consider how human beings should live in the 21st century by searching the problems which lie behind under human consciousness.

【キーワード】 無分別知 マナ識 アーラヤ識 八識 四智

### 1. はじめに

東西冷戦終焉の象徴的出来事であるベルリンの壁崩壊から10年余の時間が経過した。それは社会主義体制の崩壊であるとともに資本主義体制をもゆるがした出来事ではなかったかと思う。そうしたイデオロギーの問題にとどまらず、あらゆる価値体系が大きく変わりつつあるのが今、我々が生きている、まさにこの瞬間なのではないかと思う。

そうした時代を象徴するように国内外で危機的な問題が次々とおこっている。それは人類が未だ経験したことのない重大なものであり、まさに地球規模で解決してゆかなければなるまい。それらは例えば、世界的にみれば、地球温暖化をはじめとする環境問題、地域的に貧富の格差を生んでいる南北問題、また頻発する地域紛争、エネルギー問題等々。国内的には、やはり、ゴミ・ダイオキシンに代表される環境問題、学級崩壊・いじめ・不登校を中心とした教育問題等々、深刻な問題をかかえている。政治も混沌とし、まさに閉塞状態にある。こうした閉塞した状況を乗り越え、新しい価値体系を構築してゆかなければ、日本には、地球には未来がないのではなからうか。個人的にみれば「心の奥底から意識や全身まで、自分にもよい、人にもよい、生きるときにはよく生きて死ぬときにはまた自然に死んでいけるような、よく生きよく死ぬような」人格に変わっていかねばならないのである。また、それには「分別知だけでは人間はよくかつ正しく生きることができない。分別知を超えたより深い智慧の心を身につけなければならない」(岡野 1998) のである。

こうした問題を考えてゆく上で大きなヒントとなり得る思想が、仏教とり分け「唯識」

の思想であると思う。ここでは、岡野守也氏の著書「唯識のすすめ」（以下、引用文中に著者名のないものはこの著書による）を中心として学んでゆこうと考える。

## 2. 小乗仏教と大乘仏教

唯識の話に入る前に、仏教とは何かについて少し触れてみる。「仏教というのは読んで字の如く『仏』の『教え』であり、紀元前6、7世紀ころのインドの地方王族シャカ族出身の聖者、釈尊から始まっている。その釈尊は、あまりむずかしい表現はされないで『人を見て法を説け』の如く相手のレベルに合わせてわかりやすい言葉で、それぞれの人に合った言い方をされていた。だが、その教えは体系化されていなかった。釈尊が活着している間はそれでよかったが、亡くなった後、弟子たちの中で解釈の違いが生じた。そこでそれをどう解釈するかということで、だんだん理論的にまとめられ、体系的になっていった。それを“アビダルマ”といい、『アビ』は『対して』とか『向かって』という意味で『ダルマ』は『存在、真理』を意味し、つまり仏教的な“存在の分析”ということになる。人間とか世界とかものがどういうふうになっているかを専門家である僧たちによって、500～600年かけて詳細に分析・研究をかさねて作られていった。それはかなりむずかしいものであったことから、仏教は専門家である学僧らの一部のものとなって、一般の人々は救われなくなってしまったということで、紀元1世紀前後に、それは違うのではないかという主張を持った人々によって、そういうのは自分だけしか救えない、乗れない小さな乗り物で『小乗』である。本当の仏教は自分も人も一緒に<sup>まとい</sup>覚れる、救われる大きな乗り物で、『大乘』こそが本物なんだという仏教の運動が興った。

そして、釈尊ではない、“大乘の覚った人”つまり、“仏”が説いた新しい経典が作られるようになり、それらを『大乘経典』とか『大乘仏典』という。『般若心経』などの『般若経典』、『観音経』が含まれる『法華経』、『華嚴経』、『維摩経』、阿弥陀仏や極楽浄土のことを書いた『浄土三部経』等。つまり仏教のお経、釈尊が説いたと思っているものほとんどが大乘の経典、大乘の仏たちが説いたものなのである。

この大乘仏教は、「文学的にも優れた経典を多く生み、空の哲学や唯識の哲学を育んだ」（村松 1992）のである。そして、仏教の中でも釈尊の直伝といわれるものは『阿含経』だけなのであるということもつけ加えておく。

大乘仏典をはじめとするあらゆる経典は、死者を弔うための暗い、ニヒルなものではなく、むしろ我々に生きる指針を指し示すためのものなのである。「仏教は一貫して、人間の心がどういうものなのかを洞察することと、ただ洞察するだけではなくて、修行を通じてその心を変えていくことに中心があった」のである。

## 3. 唯識とは？

唯識についての詳細は後述することとして、ここでは唯識とは何かを概説する。「釈尊の説法である『阿含経』から、アビダルマの理論体系が整理されていったのと同じように、

大乘の經典を基にしつつ、哲学的な思想体系が整理されていく。それは、中觀派<sup>ちゅうがん</sup>と瑜伽經派<sup>ゆがぎょう</sup>の二大学派において確立されたのであった。

中觀派は、ナーガールジュナ（龍樹、150～250年頃）を祖師とする学派で『中論』を根本聖典とし、まさに『中』、もしくは『空』の論理を明らかにした。“中論”には、『行くものは行かない』とか『見るはたらきは見ない』といった、逆説的な表現がいたるところに出てくる。日常言語表現（あるいは実体論に基づく言語表現）が矛盾を孕んでおり、解体されざるをえないことを縦横に論じて、最高の真理<sup>しやうぎたい</sup>（勝義諦）のありかを示そうとしている。それは、まさしく大乘仏教哲学の根本に位置する論書であった。

一方、瑜伽經派は、唯識学派のことである。唯識教学は、大乘空觀をふまえたアビダルマの再解釈というべきものである。マイトレーヤ（弥勒）、アサンガ（無著、395～470）、ヴァスバンドウ（世親、400～480）がこの思想の大成者であり、アサンガの“撰大乘論”<sup>しやう</sup>、ヴァスバンドウの“唯識三十頌”<sup>じゅう</sup>などを根本聖典とする。

唯識は、世界は唯だ識が現したのみであるとして、我（自我）・法（世界の構成要素）ともに実体ではありえないことを、現象に即しながら説明する。そのために、意識下の阿頼耶識<sup>あらいしき</sup>といった識をたてたりする。中觀派が主に否定的表現に終始し、もっぱら勝義諦を指し示そうとするのに対し、唯識では阿頼耶識を含む八識をたてつつ、世界のあり方、輪廻の様相、修道のしくみなどを説明しようとするのである」（村松 1992）。

唯識とは、大乘經典を基に生まれた“哲学的思想体系”なのであり、それは岡野氏によれば、「心の表面の現象の問題だけではなく、ふだん自分でも気がつかないような心の奥底まで掘り下げて洞察」しているのであり、まさしく「大乘仏教の深層心理学」という言い方がふさわしい」というのである。

#### 4. 中国を経て日本へ

インドで生まれた唯識は日本へも中国を経て伝えられた訳だが、インドから中国へは、まず海のシルクロードを通り、546年に梁の武帝に招かれた真諦<sup>しんたい</sup>によって伝えられた。その真諦の訳で唯識を学び、それでは十分にわからず、どうしても原典で学びたかった『西遊記』で有名な玄奘三蔵<sup>げんじやう</sup>が、行き倒れになって白骨死体になるかわからないような陸のシルクロードを通り、その難所であるタクラマカン砂漠を越えて、文字通り命がけで中国へ運び、645年（日本では大化改新）に翻訳を始めた。その頃、653年に遣唐使として送られた中に道昭<sup>どうしやう</sup>や藤原鎌足の子の定恵<sup>じやうえ</sup>がおり、玄奘三蔵が持ち帰ったばかりのサンスクリット原典を訳している現場に立ち会いながら、唯識を学んできた。当時、日本の航海術は未熟であり、かなりのパーセンテージで難破した。唯識は道昭や定恵にとっても死を覚悟してまでも学びたかったものであったらしい。そんな危険をおかしながらも661年くらいに帰国し、飛鳥寺<sup>あすかでら</sup>＝元興寺<sup>げんこうじ</sup>に唯識を伝える訳である。

その後、657年から734年にかけて智通、智達、玄昉<sup>げんぱう</sup>らによって奈良の興福寺に法相唯識を伝え、以来幾多の変遷ののち、興福寺をはじめ薬師寺等で“法相宗”として学ばれてお

り、現在に及んでいるのである。

## 5. 唯識の全体像

唯識は、人間の存在そのもの、特に心のあり様を解き明かし、心の深層に大きな問題があるとしている。そしてそれはトレーニング次第では解決できるのだとも言っている。ここではその全体像にせまってみようと思う。

### <空>

仏教の思想的な核はこの「空」（法＝ダルマ）である。

「空」とは、決して「何もないこと」ではない。ほかのものと関わりなく、いつまでも存在しているものはないということ。「それだけで、いつまでも、何のおかげもこうむらないで、ある」ような「もの」は、世界のどこを見渡してもないことと、そのことに対する目覚め・自覚を「空」という言葉で表現したのである。

### <一如>

例えば、花そのものが分離・独立して存在していると思うのは、常識的には間違いではないが、深く考えるとやはり間違いである。本当によく考えていくと、ものはすべてつながりあって起こっている（縁起）。世の中にあるものは全部、つながって、つながって……果てしなくつながっているという見方、とらえ方をすると「一つ」ということになる。言葉を変えれば、私たちは「一つの宇宙」の部分として存在していることになる。この深い真実のありのままを「真如」とか「一如」という。

### <二空>

我空と法空。つまり、いつまでもこのままで存在する私（我）はない。そして、食物や太陽光、父母さらには地球や太陽系、宇宙がなければ「私」はいない。その意味で「私」は「空」であり、これを「我空」という。そして、私以外の「物」を見てもそれはそのままあてはまる。山も川も永久的に存在することはあり得ないし、山だけの山も、川だけが独立した川もあり得ないのである。これを「法空」という。これは「空」を展開して、私と物に関して洞察したわけで、空思想と完全に重なっている。

### <三性>

- ① ばらばらに分離して見るものの見方（真諦訳では「分別性」、玄奘訳では「遍計所執性」という）
- ② つながり・関係を見るものの見方（真諦訳＝「依他性」、玄奘訳＝「依他起性」）
- ③ 「一つ・空」を見るものの見方（真諦訳＝「眞実性」、玄奘訳＝「円成実性」）

これを世界のあり方・ものの見方の三つの局面・性質ととらえて「三性」と呼ぶ。「三性説」は、大まかにいえば、空ということをやより理論的に詳しく説明したものである。そして私たちの心が、ものあるいは世界を見る場合、分別（ばらばらの面）で見る、縁起（つながりの面）で見る、空（一つの面）で見るという3つの性質があり、ばらばら（分別性・遍計所執性）の世界から、つながり（依他性・依他起性）の世界を見る心が「迷い」

であり、一つ（真実性・円成実性）の世界から、つながり・関係（依他性・依他起性）を見る心が「悟り」だということである。

### <四智と八識>

まずは「八識」から説明すると、唯識以前では、人間の心を「六識」（意識と身体感覚の五識である眼・耳・鼻・舌・身）でとらえていたが、これに対して唯識では、心の中のもっと深い領域として「マナ識」という部分と「アーラヤ識」という部分を見出し、六識と二識を加えて「八識」ととらえた。そして、このふつうの人（凡夫）の「迷い」の多い心が、トレーニングや修行を通して「四智」（四つの智慧……悟りの心）に変わっていくと唯識では考えている。

### <五位>

今日話を聞いて明日すぐに悟れる訳ではない。段階をおって、長い時間をかけていかなければならないが、この段階を「五位」という。悟るまでにどの位の時間がかかるかというと、3カルパ（劫）という途方もない時間であるという。1カルパというのは、例えば、インドの王が象で1日に行軍する距離くらいの縦、横、高さの大きな岩の山を、100年に1度天からやって来る天女が、衣の裾でなでて帰る。岩を柔らかな衣でなでて、ほとんどすり減ることはないが、それでもほんのかすかにはすり減る訳であり、そうしたことを繰り返して行ってこの岩山がすり切れる時間が「1カルパ」だといった比喩がある位、凡夫が仏になるには大変なのであるが、悟れないとは言っていない。その悟りへの段階を説いたのが「五位説」なのである。

これを旅にたとえて説いている。

- ① 資糧位……旅のための資金や食糧を準備する段階。それまですべてのものをばらばらに捉え、自分を中心にして損だ得だ、関係ない、好きだ、嫌いだ、どうでもいい……、幸福になったとか、不幸になったとかいって、いろいろすったもんだとやってきている凡夫から、「これではいけない。こういう生き方が人間の本当の生き方ではないのではないか」と考えはじめて、たまたま教えに出会い、人間はそういう状態から抜け出ることができると知って、そのことをしっかり勉強しはじめた段階。
- ② 加行位……実際に出発して、どんどん歩行し、実行していく、修行を加えていく段階。勉強を始めてしっかりとそれが頭に入って、納得して、ますます修行をしようかという段階。
- ③ 通達位……目的地の入口までたどり着いた段階。通達・到達した段階。ここまで1カルパかかることになっている。修行を続けていくと、頭でわかっていたのが、直観的に、心の深いところで、悟りの入口の体験をする段階になる。
- ④ 修習位……修行して身につけ、習慣化していく長いプロセスであり、2カルパの時間がかかる。ちょっと悟りの片鱗のようなものが見えたような気がするところから、それが本当に身につく段階をいう。
- ⑤ 究竟位……旅の目的地。究極の境地。汚れが漏れ出ることのない世界で、不思議で、

善であり、永遠に変わらない。安楽で解放された身心である。これが究極の存在であり、真理と呼ぶのである。

心の奥底から全部完全に八識から四智という智慧の存在に全面的に変わりきった段階をいう。

### <六波羅蜜>

普通の問題をかかえている人間である「凡夫」から、悟り得る存在であることを知る「菩薩」へ、そして「仏」へと変化向上していくための実践項目。悟りにいたるための仏教の修行プロセスをいう。

- ① 「布施」……人に施すこと。
- ② 「持戒」……戒律を守ること（自分をコントロールすること）。
- ③ 「忍辱」……はずかしめや苦しいことを忍耐すること。
- ④ 「精進」……人生を基本的に今の段階にとどまっていなくて、より高くより深く向上していくものと捉えて、日々努力していく姿勢。
- ⑤ 「禪定」……人間の心は、自分がいて、人がいて、物があってといった、分離的なばらばらの捉え方をしがちであり、これを「分別知」と呼び、これがいろいろな問題の根っこにあるものだと仏教では捉えている。その分別知を超えるためには「分別を一切しないのだが、気絶しているわけでも眠っているわけでもなくて、しっかり眼が覚めている。しっかり覚めているのだけれども、私とかあなただとか、物だとかいろんなことを一切分けて捉えない、分別しない」、そういう心の状態を体験しなければならないが、その状態を目指してする修行法である。
- ⑥ 智慧……以上のような5つのことを実行していくと、あるときに「空・真如」といった言葉で表現されることをはっきり悟ることができる。その内容というか、その悟りのことを「智慧」という。理論でも勉強し、また禪定や布施や持戒等を通じて実感し、だんだん心の奥深くしみこんでいくのである。

### <無住処涅槃>

自分を自分だけで捉えるという狭い見方で見ていくと、死んだらそれで終わりということになる。輪廻を信じていれば、死んだ後の次の世もあるわけだが、近代的な物質科学主義でいうと、死んだらそれでおしまい、空しい訳であるし、輪廻があるとしたら、いろいろ苦しみのある生をまた繰り返さなければならないのである。ところが、唯識一大乗仏教では、生と死の対立・断絶のある世界や生死が果てしなく続く輪廻の世界を超えることができることとされ、それを「涅槃」という。この世から去ってしまうのではなく、この世でもしっかりと生きることができ、この世とあの世、どちらをも自分の固定的な住みか・住処としてしまわない、どちらでも自由自在にいられる、行き来できるような生き方・心のあり方がある。そういう生き方を獲得できれば、ある意味で無限の世界に入ることができ、これを「無住処涅槃」という。

以上、唯識の1つ1つの大事な要素を通して全体を理解する手がかりとしたのだが、

「空」・「一如」・「二空」・「三性」は“空”の論理を角度を変え、見方を変えて説いている。「四智・八識」は人間の心の構造を説明し、「八識」（凡夫）が「四智」（仏）に変わり得ることを教えている。そして「五位」では、その「四智」（悟り）へ向かう段階を、「六波羅蜜」では「悟る」ための方法、修行法を伝えているのである。最後の「無住処涅槃」は、最終的な到達地である「悟り」とはどういう事かを教えている。

唯識とは、空の理論的な解釈と、そこへ向かうための方法を説いた「論」なのである。

## 6. マナ識とアーラヤ識

無意識の概念は今から100年程前に精神分析を確立させたフロイトが神経症の治療の過程で発見されたといわれているが、唯識の中に無意識の考えがすでに記されている。フロイトよりも千数百年も以前に東洋において学問として成立していたというのは驚きである。

上でも触れたが、唯識では人間の心を「意識・マナ識・アーラヤ識」に分けてとらえている。これは内容的には異なるが、ユングが「意識・個人的無意識・普遍的（集合）無意識」の三層として考えたことに共通点がある。重複するところもあるが、唯識の中の無意識の概念についてユング心理学との比較も交じえながら見てゆこうと思う。

ユングが考えた人の心とは、意識の下層にある「個人的無意識とされる層は、一度は意識されながら強度が弱くなって忘れられたか、あるいは自我（人間の行為や意識の主体）がその統合性を守るために抑圧したもの、あるいは意識に達するほどの強さをもっていないが、なんらかの方法で心に残された感覚的な痕跡の内容」（河合 1977）であり、そのまた下層にある「普遍的無意識は、個人的に獲得されたものではなく、生来的なもので、人類一般に普遍的なものである。このような人類一般に共通のものにいたるまでに、ある家族に特徴的な家族的無意識とか、ある文化圏に共通に存在する文化的無意識などを考えることもできる。ユングはこれらを総称して、普遍的無意識と呼んでいることもある」（河合 1977）のである。

これに対して仏教では「般若心経に『眼・耳・鼻・舌・身・意』という言葉があるように、五感と意識をあわせて『六識』ということで、人間の心をとらえていた。しかし、この六識の働きだけでは理解しきれない何かがあることは知られていたが、心の構造・仕組みとしてはとらえておらず、『無明』という言い方で、心の深いところに非常に大きな問題がある」と考えられていた。唯識ではその考えを進めて「320年から400年頃、人間の心の奥底には五感と意識だけでは理解できない深い部分があり、それを理論化して、人間の心を、六識の他に『マナ識』と『アーラヤ識』をあわせて八つの分類・分け方でとらえる唯識の理論が完成する」のである。

マナ識・アーラヤ識について詳しく説明すると、『マナ識』の『マナ』というのは『思い量る』という意味だが、何を思い量るかということ『自分というものがある』と思ひ量るのである。しかも、心の奥の方にそういう働きがある。つまり『自分にこだわるのはやめよう』と思っても、どうしても、なぜか、こだわってしまう。この『どうしても』、『なぜ

か』というところが、意識・意志とは別の存在だということを明らかにしている」のがマナ識である。

そのマナ識の奥に『命を維持しており、命に執着していく心の働きがある』と考え、また、命を種に譬えて『命の種を蓄えているようなものだ』と考えた。アーラヤは蔵という意味のサンスクリットで、『アーラヤ識』と呼ばれ、これが心の底にある8番目の心の働き、識である。アーラヤ識は、私たちが過去に行なった善や悪の行為が、その過去と異なったときに善でも悪でもない、異なった性質のものとなって熟す（異熟）心の働きである。そして、それがすべての存在を実体的に存在すると見せてしまうというか、錯覚させるというか、仮構する、そういう元になる、種子となる心の働き」がある。

これらに合わせて、ユング心理学と唯識との大きな相違点のひとつとして“空”の論理、“悟り”の論理が挙げられる。空とはサンスクリットで「<sup>śūnyā</sup>0」という意味であるが、「からっぽ」ということではない。「色即是空・空即是色」と説く『般若心経』は「空を説いたお経であるが、『色』とは因縁によって成り立っているものをいい、それが即空であることをいっている。『空即是色』には、その空の中こそが妙有の世界なのだという深い意味がある」。「色とは形あるもの、この現象界の森羅万象のすべてをいう。このすべての事実の世界が空であるとはどういうことか」というと、仏教学では、森羅万象を因縁で説明する。因とは原因、縁とは原因を助ける条件であり、一切のものはすべて因と縁とで成り立っていると説く。因と縁とで成り立っているものは、この因と縁が消滅すれば、すべて空に帰する」のである。これは「すべてのものは空であって何もないと理解しがちである。空とは空とみる真理であって、宇宙の実相の一つの見方なのである。そこで空に執着していて本当の相<sup>すがた</sup>が見えないため、『色即是空』に続けて『空即是色』と述べたのである」。これは「何もないところにこそ、無限のものを蔵することができるという」（鎌田 1999）ことである。

すべてのものは「ばらばら」では存在しないということであり、「因」と「縁」という接着剤があることを知った上で「六波羅蜜」という修行を通じて、それを体得し、それに基づいた生き方をしてゆくのが“悟空の人格”なのではないかと理解する。このことを唯識ではどう説明するかというと「悟りの種子<sup>しゅうじ</sup>をうまくアーラヤ識に貯めることができた。それでかなりの量が貯まってきた。あるいはもう他の迷いの種子を駆逐してしまうくらいに悟りの種子が貯まり、育った。そうするとどういうことが起こるか。『アーラヤ識』は、それまでは、この全宇宙の中で、命と命とではないものを分けてしまって、命にこだわっていた。例えば私という命を考えてみると、水という私ではないもの、命ではないものとの関係・つながりの中で、今、命があるわけである。だから命と命ではないものはつながっているのであって、分断されていない。例えば私は空気を吸っている。空気はとりあえず私ではなく命ではないのであるが、その私でも命でもなかったものが、私の中の体の血液の中の酸素になることによって、私は生きている。つまり、命と命でないものはつながっている。それが宇宙の本当の姿なのだ。まるで大きな完全な鏡がそういう宇宙の本当の姿

を何のゆがみもなく映し出すような智慧を『大円鏡智』という。

アーラヤ識が大円鏡智に変化してしまうと、命へのこだわりがないので、ましてや私へのこだわりは持ちようがない。だから、命と命でないもの、そして、私と私でないものは一つである。根本的には平等だと思ふ。そういう心の奥の深い智慧のことを『平等性智』という。私がいると思ふ、私にこだわっていたマナ識の思いが、完全に他者と宇宙と私が入り混じるといふ『平等性智』に変わる。

心の奥底での悪循環状態が、大円鏡智と平等性智という循環、いい循環に変わってしまうと、そこから起こってくる意識は——もののすべては本当は一つなのだ。……つながり、つながり、つながり、つながり、つながり、つながり、仮に区分でき、分節できるような形で、ある一定期間それぞれの姿を持っている。ある一定期間それぞれの姿を持ちながら変わっていき、それぞれの形という意味では消えてしまうのだけれども、全体の一つということは変わらない——そういうことが意識的にわかる、すばらしい観察の智慧、『妙観察智』に変わる。

心のいちばん底で、命のこだわりが、命と命でないものをそのまま映し出して、命のときは命、命でないときには命でないものというふうには、自然に流れていくことのできる心に変容して、心の奥に、他者と自分と世界とが分かれていないという『平等性智』ができてくる。そして、意識がそういうことが絶えず自分の心の表面に浮かんでくる『妙観察智』になると、五感・意識、あるいは全心身は、そのときそのときに最もふさわしいことができるようになり、それを『成所作智』という。

『水が高きから低きに流れるがごとく』という言い方があるが、高いところにある水は、水路があり、障害がなければ、自然に低い方に向かって流れていく。もし、私と他者の間に本当にそういう心があったら、私にたくさんの富があり、向こうに困っている人がいたら——同じ体の傷ついた足を傷ついた手が、手のほうがまだ余裕があるから治療するような形で——提供する、流すことができるようになる。なすべきことが、そのときそのときに全く自然に流れるようにできるようになる。『成されるべき所のことを成す』と書く『成所作智』という智慧に変容する。

つまり、アーラヤ識→大円鏡智、マナ識→平等性智、意識→妙観察智、五感→成所作智に変わるということである。

このように『八識』が転換して『智慧』が得られることを『転識得智』という。

ユング心理学は、「集合無意識のレベルまで含んだ無意識と意識の統合による自己実現・個性化を目指しているが、これはつながり・関わりを他者や民族や人類といったレベルまで深め、広げていく視点だと見ることができるから、ある意味では宇宙意識のレベルに達しているといっているし、さらに空のレベルにも近づいていると思う。しかしやはり、ふつうにいう自我よりははるかに広く深いレベルではあるにしても、ある種他との分離性が残った自己のところまでだといっていると思う」。唯識の示す人格は完全な「無分別」の世界であり、人間は宇宙と一体となり得る、他人とか自分とか、ものとかを超えることができる存在であるとしている。

「唯識そして仏教の基本的なメッセージは、確かに現状の人間は、悪まみれだし、煩惱まみれだし、迷いばかり、悩みばかりで、いろんなトラブルを引き起こす存在であり、これは唯識でいえば『八識の凡夫』だが、トレーニング次第では、これが心の奥底から意識や全心身まで、自分にもよい、人にもよい、よく生きよく死ぬるような『四智の仏』になり得るといっているのである。

## 8. おわりに

唯識について学んで来たのだが、唯識はいわば、仏教の中では反主流といった扱いで、平安時代、鎌倉時代～江戸、明治時代を通して来た。それは地味で難解な論理であったからであるらしい。しかし、その小さな灯は現在まで灯され続けている。

20世紀は、大きな世界大戦を2度も経験し、非人間的な核兵器までも作り上げてしまった。戦いというのは、こうした世界規模の戦争から、いじめや兄弟げんかに至るまで、その大小にかかわらず自者と他者とを分けて考えることから発生する。また「自分」の生活の向上のみを追求したあまりに、自然を破壊し、地球を傷つけ、「他者」を顧みることを、あまりにもしなすぎた。これからは、こうした分別知をどう克服してゆくかが、大きなテーマとなることと思う。その意味から岡野氏のいうように『唯識は21世紀の常識』とならなければ、地球に未来はないかも知れない。

唯識は我々に、意識的、無意識的な「エゴイズムから脱却しなければならない」とのメッセージを悠久の時空を超えて語り聴かせているのである。

仏教では、“人生は「苦」である”ととらえている。これは、悩み、悲しみといった意味あいより、人の一生は、自分の思い通りにはならないことを言っているのである。そして、人間をはじめとして、あらゆる存在は変化してゆく。そのままでは存在することはない。絶対的なものはあり得ないし、また、「私」だけで生きられる「私」は決して存在しないと説いている。これらのことは私たちが、まさに毎日、本当にひしひしと感じていることなのである。これはかなり辛いことではあるが、それらはあるいは人間存在を象徴することなのかも知れないとも思えるのである。

最後に、唯識について学ぶ機会と発表の場を与えていただきました、北澤勝親先生、土井進先生に心より御礼申し上げます。

### 【参考・引用文献】

- 岡野 守也著 1998 唯識のすすめ NHK出版  
鎌田 茂雄著 1999 いのちの探求(上) NHK出版  
河合 隼雄著 1977 無意識の構造 中央公論新社  
竹村 牧男著 1992 覚りと空 講談社

(2000年3月31日 受付)